

掲載コンテンツのご紹介

平成30年度に追加しました、17本の地域映像の概要をご紹介します。
実際の映像は「地域文化資産デジタルコンテンツ発信事業ポータルサイト」にてご覧頂けます。



ほっかいどう れぶんちょう れぶんちょう してい むけい みんぞく ぶんかざい
北海道礼文町<礼文町指定無形民俗文化財>
「四ヶ散米舞行列」

礼文島香深(かふか)入舟(いりふね)地区の巖島神社に伝わる四ヶ散米舞行列は、80年以上の歴史を持つ礼文島唯一の伝統芸能であり、毎年7月の例大祭にて行われる神輿渡御の際に、神輿の先導役を務める行列である。四ヶ散米舞とは松前神楽の1つで、江戸時代に武運長久を願い、蝦夷鎮定を表す神楽舞曲として創作され、四人の神職が弓、剣、太刀等を持って舞う。この舞に着想を得て行列化したものが四ヶ散米舞行列とされる。

四ヶ散米舞行列は、17世紀末には松前藩領内で行われるようになり、明治30年代には、福島町福島大神宮の例大祭にて行われ、現在に至っている。明治時代、ニシン漁に沸き立った北海道日本海沿岸では多くの開拓者が入植し、礼文島でも開拓者の中から成功者が続出した。大正時代末期、豊富な財力を持つ開拓成功者たちは、北海道では著名な神職家系である常磐井家から巖島神社へ宮司を迎えたが、同時に、四ヶ散米舞行列や奴行列、荒馬踊りなど福島町由来の芸能も礼文島へ伝承された。

しかし、昭和30年代には奴行列と荒馬踊りは途絶えてしまい、現在では四ヶ散米舞行列のみが地域住民の絆を支え、心をつなぐ貴重な芸能となっている。
<平成28年度>



あomoriken ひろさきし あomoriken してい むけい みんぞく ぶんかざい
青森県弘前市<青森県指定無形民俗文化財>
「悪戸獅子舞」

悪戸獅子舞の由来については定かではないが、悪戸獅子舞保存会に巻物が伝えられており、初代の助左衛門が弘前城落城の際に踊りが最も優秀だったと書かれている。保存会は現在15名程で、年に数回実演を行っている。獅子舞は「大獅子」「女獅子」「中獅子」と「おかしこ」で構成され、囃子方は「笛」「太鼓」「鉦」で構成される。演目は「街道互り」「橋かけ」「山かけ」「女獅子隠し」等がある。

7月の初旬には、岩木山麓獅子連合共演会が開催され、順に獅子舞を演じて一般に披露する。7月16日には常盤神社の例大祭の前夜祭において、神前で獅子舞を奉納する。

12月中旬の獅子納めには町内を巡回しながら獅子舞を披露し、その年を終える。<平成29年度>



ふくしまけん こおりやまし こなんまち よこさわ こおりやまし してい じゅうようむけいみんぞくぶんかざい
福島県郡山市湖南町横沢<郡山市指定重要無形民俗文化財>
「横沢の麓山まつり」

郡山市横沢集落では「麓山(はやま)神社」のお祭りが行われている。明治39年の「由緒書」によれば、悪霊鎮護のため「大山祇命」「羽山津見命」をここに鎮座すとあり、およそ1,000年も続いていることになる。祭は「由緒書」には9月28日とあるが、現在では、体育の日の前日の土・日曜日に行われている。祭りの準備は、ご神体を山上の本殿から山麓の斎場に迎えることから始まる。祭の先達役(せんだつやく)は法院家である三浦家が努め、総代の3名と世話人12名が祭を指導する。宵祭りは「お籠り」をする小中学生が中心となり沐浴(もくよく)が始まる。その後「火渡り」が行われ神職から順に3回火の上を歩く。翌日は本祭りが始まるが、まず参籠者である子供連は裸で腰締縄(こししめなわ)と手に幣を持って山に登り神社にお参りをして、役目を終える。御神体は神輿に移され、神幸が行われる。先頭は猿田彦(さるたひこ)の「幣払い(ぬさばらい)」と鈿女命(かんだしめのみこと)の「塩祓い(しおはらい)」が立ち、全戸を廻る渡御が行われ、各家で祝詞を奏上しお祓いが行われる。神幸が終わるとご神体を山上の神社にお送りし、祭が終了する。

<平成28年度>



ふくしまけん にほんまつしとさわちく ししていむけいみんぞくぶんかざい
福島県二本松市戸沢地区<市指定無形民俗文化財>
「八幡神社の三匹獅子舞」
はちまんじんじゃ さんびきしまい

この獅子舞は戸沢八幡神社に、五穀豊穡、地区の繁栄を祈って、毎年秋に奉納される三匹獅子舞である。江戸後期に伝えられたとされ、およそ200年の歴史がある。

獅子舞の構成は「太郎獅子」「次郎獅子」「雌獅子」「ササラ振り」の4人である。踊り手は氏子の中から選ばれる。伝統的には男子が選ばれてきたが、近年では女子も参加している。準備は、子供達の獅子舞の練習も行われるが、他にササラ作りも行われる。奉納の前日、庭元に集まり「踏揃い」と称して、衣装を整えて獅子舞の仕上げを行う。

奉納の当日、庭元で一度舞った後、戸沢八幡神社に向かう。演目はまず神社入り口での「三拝」から始まる。次いで社殿で「三拝」し、神社をひと廻りして「三拝」を繰り返す。

社殿では神事が取行われ、神職の祝詞の後関係者一同お祓いを受ける。獅子舞は「宿入り」から始められ、「前庭ならし」「花舞(四方かため)」「そぞろき」「後庭ならし」「唄切り」「雌獅子掛け」が終わると社前に上って「三拝」をして、終了となる。とても子供達の演技とは思えない見事な舞に瞳みさせられる。

<平成28年度>



いばらきけん し
茨城県かすみがうら市
「帆引き船出航までの匠の技」
ほび せんしゆつこう たくみ わざ
～帆柱と帆桁の制作技術を中心として～
ほばしら ほけた せいさく ざじゆつ ちゆうしん

帆引き船は、明治13年に折本良平により考案された。シラウオ漁はそれまで2～3隻の船で20人以上も人手が必要な処、2～3名で十分となり家族中心の個人操業へと変化し、沿岸漁民の生活安定に大きく寄与した。戦後の最盛期には900隻を数え、霞ヶ浦・北浦を代表する漁船として活躍した。昭和40年頃からトロール漁に替わり衰退したが、昭和46年からは観光船として復活した。本編では、帆引き船の技術の継承について、重要な課題について映像で解説している。帆柱と帆桁には孟宗竹が使用され、竹の持つシナリを巧みに利用している。帆桁は2本の竹を組み合わせ、重心を船主側に取り、帆が船尾に落ちないように工夫されている。その他帆を張るための各種ロープや金具の取付け等についても詳細に説明がなされている。

毎年7月20日以降の日曜から11月末の日曜まで帆引き船を運航し、観光の目玉としている。

<平成28年度>



とちぎけん もてぎまち とちぎけん ししてい むけい みんぞくぶんかざい
栃木県茂木町<栃木県指定無形民俗文化財>
「河井のささら」
かわい

およそ900年前「後三年の役」で、源義家が奥州に向かう際、この地に立ち寄ったと伝えられる。その折、都から伴ってきた「長寿姫」をこの地に残し出陣することとなった。この別れの宴で、戦勝と五穀豊穡を祈願して神楽を舞わせ、姫との別れを惜しんだと伝えられる。その後、長寿姫は義家の帰りを待ちわびていたが病いで逝去した。村人はこれを悲しみ、毎年姫の霊を慰め、併せて五穀豊穡の祈りを込めて「ささら舞」を舞い、年中行事としてきた。

舞は「関白流獅子舞」とされ、13名の小学生が舞う。現在では毎年「敬老の日」に八幡宮(はちまんどう)と長寿寺(ちようじゆじ)の境内で奉納される。獅子舞の構成は「男獅子」2名、「女獅子」1名、「ふくべ」2名で舞うが、途中で「雑子(ざっこ)」4名が加わる場面もある。少子化の問題もあるが、故郷の誇りとして長く続けてほしい伝統芸能である。

<平成28年度>



さいたまけん ふかやし ふかやし してい むけい みんぞく ぶんかざい
 埼玉県深谷市<深谷市指定無形民俗文化財>
 まちだ ししまい
 「町田獅子舞」

深谷市町田地区に古くから伝わる獅子舞がある。八幡神社秋の例大祭(10月15日)には「棒使い(剣道太刀打ち)」「獅子舞」が奉納されてきた。特徴は獅子頭が古くから伝わるもので、法眼獅子(ほうがんじし)の角に「天下一」、「日下開山六太夫」の銘があるところから、安土桃山時代の作とも、また太閤秀吉から与えられたものとも伝えられる。

昭和61年から一時休止したが、平成24年に練習を開始し、25年から地域の青年達を中心に復活した。毎年10月15日周辺の日曜日に地域の各種イベントの中で「棒使い」と共に、伝統ある獅子頭を使用して獅子舞が行われている。

演目は、かつては数多くあったが最近では「棒入り・チャララ」「チャリトロレ」「ヲカザキ」「本上げ」となっている。獅子舞の構成は「法眼(ほうがん)獅子」「雄獅子」「雌獅子」「棒」「太刀」の5名となっている。やっと最近になって小学生の参加者も増え、後世への伝承についての期待が膨らむ。

<平成29年度>



さいたまけん ひがしちちぶむら ひがしちちぶむら してい むけい みんぞく ぶんかざい
 埼玉県東秩父村<東秩父村指定無形民俗文化財>

せんげんじんじゃ ししまい おおうちざわ ちく でんしよう ししまい きろく
 「浅間神社の獅子舞」～大内沢地区に伝承される獅子舞の記録～

西暦1,500年の頃、当地区に悪病が流行し、村人が困窮した時、龍頭(たつがしら)を用いて氏神(うじがみ)浅間神社に奉納し、悪病退散、病氣平癒を祈念したのが始まりといわれている。獅子舞の流儀は「ツシマ流」と伝えられており、構成は「牡獅子(前獅子)」「牡獅子(中獅子)」「牝獅子(後獅子)」の3頭である。いずれもタツツケ袴を付け、ワラジ履きで舞う。演目は「幣(へい)掛り」「まり掛り」「太鼓掛り」「竿掛り」「雌獅子」「弓掛り」「花割り」の7庭(しば)となっている。

最近では子供達も参加するなど後継者の育成が積極的に行われている。

<平成29年度>



とうきょうと あおがしま とうきょうと してい むけい みんぞく ぶんかざい
 東京都青ヶ島<東京都指定無形民俗文化財>

あおがしま きょうど げいのう
 「青ヶ島の郷土芸能」

ひとざと はな いけ さわ つき ぶし ほうねんいわ うた みんよう
 「人里離れた池の沢」「月とどうしょ」「ヤトトン節」「豊年祝い唄」の4民謡

江戸時代の天明の頃、岩手では岩木山が噴火し(1783年)、長野では浅間山が噴火した。この頃、各地に天変地異がおこり「天明の飢饉」と後に呼ばれた。東京から約360Km離れた絶海の孤島青ヶ島では大噴火が起きた(1785年)。人々は止む無く隣の八丈島に逃げ伸びた。青ヶ島の人々にとって、これが苦難の始まりであった。

青ヶ島の人々にとって八丈島は決して安住の地ではなかった。故郷へ帰りたいという切なる願いは「起し返し」へと駆り立てた。しかしその願いは中々成就せず、30数年を経て人々は年老い、青ヶ島を知らない世代の若者も増えた。青ヶ島の人々の弛まぬ努力と思いは、その後十数年の歳月を経て実を結ぶことになる。1835年遂に故郷への「還住」が実現した。実に大噴火から50年の後であった。

本編は「還住太鼓」で始まり、冒頭に挙げた4つの「島唄」と踊りが披露されている。

<平成29年度>



ながのけん すざかし
長野県須坂市

いのうちちようちく ごさいれい いま のこ でんとう ちようないじゆんこう
井上町地区「御祭礼」～今も残る伝統の町内巡行～

西に千曲川、東に南志賀の山々を望んで「清き流れの鮎川や紫匂う桐の里」と謳われた井上町の鎮守の森に鎮まる小坂神社は延喜式内の古社で、井上十六部の惣社として崇敬されてきた。境内には須佐之男命(牛頭天王(ごずてんのう)と習合)を祀る八坂社が勧請されている。毎年七月、小坂神社の御祭礼に合せて須佐之男の命を奉安する天王神輿が町内を隈なく巡回する「天王おろし」が行われる。夏祭りの準備がはじまった。お仮屋が組立てられ氏子全員で境内を掃き清め幟が立てられる。神輿の前では出発の神事を行い獅子舞が奉納され「天王おろし」の幕を開ける。

牛頭天王は神仏習合の神で疫神の性格があり、遠く平安時代に京の祇園社(現八坂神社)では牛頭天王の御霊をお慰めして疫病の退散を祈った。祇園御霊会は疫気ばらいの夏祭りとして広く人気を博した。

「天王おろし」は井上町に夏の到来を告げる伝統の祭りで、町外に通じる九個所の社には結界が設けられ外から悪霊や疫病が侵入しないよう神事を行い獅子舞を奉納して清祓が行われる。巡幸後の神輿は、お仮屋に安置され「天王あげ」までの間、氏子により警護される。井上町の「天王おろし」は平安の故事に由来する祇園会信仰の一端を今に伝えている。

<平成28年度>



しずおかけん ふじし
静岡県富士市

ふじ さんちよう とりい ほうのう いわぶちとりい こう
富士山頂に鳥居奉納「岩淵鳥居講」

富士山は、信仰の対象と芸術の源泉として、2013年に世界遺産に登録された。富士山は何度も噴火を繰り返してきた。人々はこれを恐れ、神の宿る山として崇拝し、信仰の対象とした。人々は、噴火を鎮めるために富士山の神に祈りを捧げた。これらの信仰の中心は富士山本宮浅間(せんげん)神社で、全国に広まった1,300社の浅間神社の総本山と称されている。また、富士山8合目以上はこの浅間神社境内と定められている。富士山頂直下の鳥居は12年に一度申年に、岩淵鳥居講の人々によって建て替えられている。江戸時代、富士川の渡船役を担っていた岩淵村が、船材に富士山の材木を使用していたことから、そのお礼と渡船の安全祈願のため、富士山に鳥居を奉納したと伝えられている。江戸時代中ごろから始まったとされるこの鳥居奉納は、その後絶えることなく続けられている。

<平成28年度>



あいちけん とよたし
愛知県豊田市

さいじ きらく とよたし はな
とよたの歳時記録 豊田市の「花のとう(おためし)」

「花のとう(おためし)」は、愛知県を中心に主に旧暦4月8日に行われてきた作占い行事である。神社や寺院の境内に農作業の様子を模型や人形などでジオラマ風に表した「おためし」と呼ばれる飾り物を作り、参詣者は各々その年の作物の出来不出来や天候、景気などを占う。豊田市内では、現在、守綱(もりつな)神社(寺部(てらべ)町)、松生嶋(しょうふじま)観音(九久平(くきゅうだいら)町)射穂(いぼ)神社(保見(ほみ)町)の3か所で行われている。

豊田市内の「花のとう(おためし)」の行事は、それぞれの地域の主催者が、毎年5月8日に行われる熱田神宮の豊年祭の「おためし」を見学するところから始まる。天候を表すといわれる神様の衣の色や、田所(田んぼの様子)・畠所(畑の様子)の飾り物の配置などの詳細を記録し、地域に持ち帰り、自分たちの「おためし」を制作するのである。

毎年、位置や並べてあるものが変わるため、必ず熱田神宮に見に行かなければならない。「おためし」を制作する際には、熱田神宮の「おためし」を基にするが、それぞれの地区で制作する人々が手作りした飾り物などを配置するので、3か所の「おためし」は人形の作りや顔立ち、雰囲気など、同じところがなく、見所の一つとなっている。

<平成29年度>



くまもとけんくまもとし にしく かたちまち
熊本県熊本市西区河内町

くまもとし してい むけい みんぞくぶんかざい かたちまち してい むけい みんぞくぶんかざい
＜熊本市指定無形民俗文化財＞＜河内町指定無形民俗文化財＞

しらはまゆわと かぐら
「白浜岩戸神楽」

白浜神社は1530年頃、三柱の神を祀る神社として造営され、その後2度の再建を経て現在の場所に遷宮された。「白浜岩戸神楽」は、白浜神社創建の頃、五穀豊穡や無病息災を祈願して舞ったのが始まりとされ、現在、舞子は白浜地区にすむ小学生の男子が高校生になるまでの7～8年間交代なしで務める習わしとなっている。

白浜地区には白浜神社を始めとして、白浜恵比寿大社等7か所に神々を祀るお宮があり、年中行事として、5つの大きな祭礼が行われている。1月1日の元旦祭から始まり、6月1日の還暦・厄入り行事では、7か所すべてのお宮をを還暦・厄入り等の年齢の人が巡拝する。10月5日白浜龍神宮秋季大祭では、子供相撲なども催され、地区での最大の祭りである10月15日白浜神社大祭では、年に一度、この夜にだけ白浜岩戸神楽全11座が舞われる。そして一年の締めくくりとして12月25日に大祓い神事が行われる。

本編では白浜岩戸神楽全12座舞の舞の全てを是非ご覧いただきたい。

＜平成29年度＞



おきなわけん し
沖縄県うるま市

し でんとうげいのうえいざうかじぎょう
「うるま市伝統芸能映像化事業」

「宮城(ナグスク)のウスデーク」ウスデークとは五穀豊穡、集落の繁栄を願う祭祀舞踏であり、各種祝い事にも踊られる。約400年前から始められたとされ、毎年旧暦8月15日の十五夜祭の夜踊られる。行事は「じしち(地節)」と呼ばれる集落4か所の場所を巡り、歌と踊りが奉納される。各所では「あなびたーぶし(姉部達節)」「くぬやしちぶし(此の屋敷節)」「いしんにぬみちぶし(石根道節)」を最初に踊る。踊り手は小学生から90歳までの約15人、円陣で踊るゆっくりのテンポは古典の「むとうぶし(本節)」と言い、速いテンポの場合は「はなぶし(花節)」という。その他には「ぐしかわ(具志川)のウスデーク」「田場(たば)のウスデーク」「東恩納(ひがしおんな)のウスデーク」「屋慶名(やけいな)のウスデーク」「津堅(つけん)のウスデーク」「石川(いしかわ)のエイサー」が収録されている。各地のウスデークとエイサーはそれぞれの特徴があり、詳細については是非本編をご覧いただきたい。

＜平成27年度＞



おきなわけんおんなそん おんな ほうねんさい
沖縄県恩納村「恩納の豊年祭」

恩納村恩納区では、毎年「豊年祭」がムラの五穀豊穡と平和を祈願し、旧暦八月に行われる。区の青年組織(男性30歳から37歳まで)である二才団(にーせーだん)が恩納区青年会、恩納区伝統芸能継承保存会の協力を得て、近世に行なわれた王府芸能である御冠船踊りの流れを汲む組踊り、端踊りほか民俗芸能などを師匠から教わって演じる。豊年祭は旧暦8月10日の旗スガシからはじまり、二才団はノロ、神人(かみんちゆ)そして区長と共に神アサギで御願をあげ、本番当日にはウドウイガマにて御願をし、その後ヌドウンチにて御願をあげ、長者の大主を演じ、本番を迎える。夕方より舞台が始まり演目「長者大主」「上り口説」「笠口説」などの踊りから始まり、「忠臣身替」などの組踊りを披露する。

＜平成29年度＞



おきなわけんよみたんそん
沖縄県読谷村

きなぐみおどり ちゅうしんぐさまる わん でんとう まも
喜名組踊「忠臣護佐丸」～130年の伝統を守る～

15世紀琉球王朝の時代に、絶大な権力を持った「護佐丸(ぐさまる)」はその権力を狙う「阿麻和利(あまわり)」に不意を突かれ攻め込まれてしまった。「護佐丸」はやむなく妻子を自らの手につけ、自害して果てた。その子の内一人は幼子であった為難を逃れ、やがて成長し「亀寿(かみじゅ)」を名乗り、時の「琉球王中山(ちゅうざん)」に面会することが出来た。「琉球王中山」は「亀寿」に、先の誤りを詫び、親の仇討を許した。中山王の兵と共に仇の「阿麻和利」を打ち目出度く親の遺痕を晴らした。・・・という仇討物語が「組踊り」となって当地の130年続く伝統芸能だ。「忠臣護佐丸」は唄あり、踊あり、立ち廻りありの舞台劇で2時間の上演時間となっている。喜名で伝統芸能保存会が出来てから、4年に一度上演されるようになった。10月8日の本番を控えた2カ月程前からの保存会の練習風景や先輩諸氏の指導など、保存会の活動が綿密に楽しく収録されている。はたして本番の首尾は如何であろうか。

<平成29年度>



おきなわけんやえせちよう
沖縄県八重瀬町

そせん うたげ がんごうさい やえせちよう とうめ ことくすく
祖先との宴「籠甲祭」～八重瀬町 当銘・小城～

籠(がん)とは、死人を入れた棺を乗せ墓まで運ぶ「輿(こし)」のことで4名で担ぐ。当地の籠は、1833年に国王から拝領したとされている。この籠が最後に使用されたのは1965年小城(ことくすく)の長老の葬儀であった。「籠甲祭」は1, 3, 7, 13, 25, 33年の年忌の旧暦8月10日に行われる。かつてはこの地方での死者の弔い方は、洞窟や山林などに死体を置き、風葬とすることが多かった。その後、血の繋がった親族が一つになって「門中墓」が作られるようになった。

「籠甲祭」は両集落の区長や役員がしきたりにより小城の集会場に集まり、段取りなど

詳細を決める。その後で、「籠屋(がんやー)」「籠を収納しておくところ)に集まって祈りを捧げる。それぞれの集落の中を、旗頭を先頭に、いくつかの拝所で供物と共にお祈りを捧げ、道中「舞踊」、「棒術」等を披露しながら「道ジュネー」を行って、集落を巡る。やがて夜になると両集落とも仮設の舞台上、「組踊」を始めとして「舞踊」「喜劇」「子供エイサー」「棒術」などを披露し、先祖との宴を盛り上げる。

<平成29年>